

はじめに

この報告書は、日本の3地域と韓国の4地域における統計的社会調査の結果をまとめたものである。各地域において、1500～1600人のサンプル数で、厳密な無作為抽出を伴い回収率も高く、質の良い調査を実施することができた。この研究の特色は、調査会社に委託することなく、現地の大学と協力しつつ直接調査員を管理し、厳密な社会調査を実施したことである。各章では、社会意識や人間関係に関する分析結果をまとめている。日本と韓国は、東アジア内の似たような国だと思われがちだが、実際の人々の価値観や社会意識、行動は、かなり異なる部分がある。詳しくは各章に譲るが、社会意識と人間関係や行動に関する学術研究としても貴重な結果を得られ、また、各国における社会調査の現場において、調査実施技術を蓄積するという意味でも、貴重な成果を得ることができた。

多くの社会調査法のテキストには、調査の企画（リサーチデザイン）や、調査対象者を選ぶための無作為抽出の計画（サンプリングデザイン）、質問項目の作成（クエスチョンアデザイン）等について記述がある。しかし、実際に調査現場で、どのように調査員を管理し、予備サンプルを用いることなく良い回収率を挙げて、適切に回答を集めれば良いのか、つまり調査の品質管理については、ほとんど解説がなく、ベテラン研究者の経験と勘による部分も多い。しかし、団塊の世代とよばれる社会学者達が引退しつつある時代に、プライバシー意識の高まりなど調査を行う環境は厳しいこともあり、現場での貴重な経験は失われつつある。調査現場での、調査の品質管理については、まだこれから、知識を蓄積していかななくてはならないだろう。

日本以外では、抽出時の調査対象者の他に、予備サンプルを用いて、見かけ上の回収率を高めることが多い。しかしこのような調査は、厳密な品質管理のもと、質の良いデータを得たとは言えない。各国で調査会社に委託した調査は、調査現場では、かなり問題の多い調査管理が行われていることも多い。しかしほとんどの場合、研究者は調査現場を見ることもなく、調査現場の実態は、研究者には分からないブラックボックスとなっている。我々は、無作為抽出の実施、お願い状の作り方、調査員の配置、調査当日の助手や院生による管理、調査結果の入力とデータファイル作成まで、一連の作業をすべて自分達で行い、調査現場での技術を蓄積することができた。このことは、今後の国際比較研究のためにも、貴重な知識となるだろう。今後も、厳密な無作為抽出と調査の品質管理を伴う独自の社会調査を実施し、貴重な経験を蓄積していきたいと考えている。なお筆者は2008年度は、ソウル市立大学と台湾の台北近郊の淡水大学の訪問教授として海外に滞在し、インタビューなど記述的社会調査も行った。

この調査は、多くの人々の協力がなければ、実施できなかったものである。調査に協力いただいた人々に深く感謝したい。